



視覚障害

視覚障害とは

視覚には、視力・視野・光覚・色覚・屈折などの機能があり、そのうちの視力・視野のどちらか、または両方の機能が十分でないため、眼鏡やコンタクトレンズなどを使用しても見え方が良くなり、視野が狭くなり人や物にぶつかるなど、ある程度以上には改善されない状態を「視覚障害」といいます。

視覚障害は、視機能のうちの矯正視力及び視野の程度により、視覚障害等級の1級(重度)から6級(軽度)に区分されます。矯正視力とは、近視や乱視などの矯正眼鏡をしたときの視力です。視野は、視線をまっすぐにして動かさない状態で見えている範囲です。

分類と説明

視覚障害の種類

- 全盲、盲** 見えない、ほとんど見えない(視覚的な情報を得られない) — 視覚障害等級の1級～2級
- 弱視** 見えにくい(保有する視力を活用して、複合的に情報を得る) — 視覚障害等級の2級～6級

障害の程度(見え方や見える範囲等)

- 視野狭窄** 見える範囲が狭い、視野の一部が欠損している、視野の中心部が見えない(中心暗転)
- 光覚障害** 光を非常にまぶしく感じる、暗いところになると見えなくなる(夜盲)、明るいと見えにくくなる
- 色覚障害** 色の区別がつきづらい、特定の色が別の色に見える

「視覚障害」といっても、見え方の困難はそれぞれ違い、多様な見えにくさがあります。

視覚障害のある人の困難さ

私たちは、日常生活、移動、コミュニケーション、修学、就労など様々な場面において、視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚・平衡感覚を使って情報を得ていますが、そのうち「視覚」から80%以上の情報を得ていると言われていています。視覚障害は“情報障害”ともいえるのです。

困難の具体例

修学

教材 履修案内 教科書 書籍 プリント 試験問題 板書 スライド ビデオ 等を読み取るのが難しい
状況把握 空いている席 他の学生の様子 教室の雰囲気 等の状況把握が難しい

コミュニケーション

気軽な交流 補助具(画面読み上げソフト内蔵のPC等)を使わなければ文字ベースの交流が難しい
心理推察 非言語的コミュニケーション(相手の表情、うなずき、指さし、こそあど指示語)等を読み取るのが難しい

移動

危険回避 通学 構内での移動 道路上の障害物 駅のホーム 通行人 等 状況からの危険察知が難しい
情報取得 地図 案内表示 看板 等を読み取るのが難しい



視覚障害のある人への支援

視覚障害による問題・困難さを把握し、適切な対応や配慮、人的支援、支援機器・技術の活用により、解決・軽減することができます。

対応・配慮の具体例

電子メールの活用

	物的資源	人的支援	環境調整	その他
入学試験	試験問題の点字化 ^{*1} 拡大		別室受験	試験時間延長(1.3~1.5倍程度)
教科書 プリント 連絡事項	電子テキストデータ提供 ^{*2} 点字化 ^{*1} 拡大	対面朗読		電子メールの活用
移動	白杖		安全の確保 スムーズな移動への配慮 ^{*3} (構内の安全確保、教室の変更など)	
実験	機器操作の工夫	アシスタントの配置		状況知覚の工夫 安全性確保
体育、実習		アシスタントの配置		できることの工夫 ^{*4}

*1 点字使用者は約10%、中途失明の場合、習得に時間がかかる。

*2 画面読み上げソフト、画面拡大ソフトを活用して、パソコンで利用する。元原稿を早めに入手しなくてはならない。教員の理解と協力が重要。

*3 ガイドヘルプについて まず本人に聞く。「今ガイドしてほしい?」「どんな方法で?」周囲の学生や教職員などの気軽なガイドで安全で速やかな歩行ができる。

*4 できるように内容を検討。履修拒否・免除、見学ではない。

対応・配慮のための設備・機器例

設 備	通路	点字ブロック
	部屋	点字表示
	エレベーター 階段	音声ガイド 段差マーカ
機 器	点字	点字プリンタ/プロッタ 立体コピー機 点訳ソフト 点字 PDA(電子手帳) ピンディスプレイ OCR(文字認識装置) スクリーンリーダー DAISY(デジタル録音図書再生機)
	音声 拡大補助 光源	拡大読書機 画面拡大ソフト 単眼鏡 ルーペ 電気スタンド 遮光眼鏡 懐中電灯 など

コミュニケーション・バリアフリー支援室より

九州大学のキャンパスはとても広大で、様々な部局の建物が入り交じっています。また、特に伊都キャンパスにおいては、歩行者だけでなく、自転車や自動車の通行が頻繁にあります。このような環境のなかでも、視覚障害のある学生が移動できるように、点字ブロック(誘導用タイル)等を設置していますが、視覚障害のある学生の困難さをすべて解消することはできません。多くの学生や教職員が、意識をもって行動することが必要だと思っています。とりわけ、以下のようなことが課題となっています。

学部生： キャンパス内(長い距離)の移動が多い。休み時間は人が多く、移動に危険が伴う場合がある。特に、自転車の通行・駐輪マナーの改善が必要。ハード面、あるいは人の多さにより、ひとりで食堂や購買を利用することは難しい状況がある。

大学院生： 学部生に比べて移動範囲は限られるが、学会や研究会など、大学外での活動も増えるため、ガイドヘルプ等の支援が必要になる。学部生以上に、読む文献などが増えるため、テキストデータを提供するなど、情報面での支援も重要。研究室におけるハード面の整備なども、必要に応じて実施する必要がある。

以上のように、ハード面だけでなく、ソフト面においても改善が必要になります。

